

歴史のまち いしおか

GEO AND HISTORY

ジオと歴史



吾国山・愛宕山ジオサイト

― 滝の周辺に活動した宗教者と不動明王の信仰を楽しむ ―

吾国山・愛宕山ジオサイトは、石岡市北東部の笠間市と接する太田・中戸・瓦谷地区に位置します。この地域には、斑レイ岩、花崗岩、変成岩と変化に富んだ岩石と地形となつています。

山は、天界にいとされる神々が人の世界に降臨する際に、拠点となる場所と考えられてきました。富士山の山頂に浅間神社が、日光の男体山山頂に二荒山神社が鎮座するように、日本全国の山々に神社が設けられるのは、そうした日本人の考えからです。

日本に仏教が伝えられて以降、古来の神道と合わせ、考えられて成立したのが神仏習合思想です。そのために、山には神と共に仏の存在も考えられるようになりまし。こうした、山の神や仏と一体となり、験力を体得しようとした人達に山伏という宗教者がいました。山伏は、古代において山に降臨する神という考えを基に山岳信



力強く流れ山の神や仏のパワーを感じさせる鳴滝

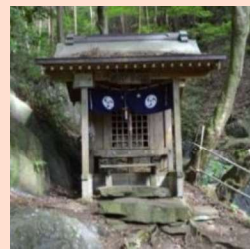
仰を始め、具体的に実践的に山に籠もり修行することを行っていたのです。山は、時には火山となつて力を見せたり、大地へ恵みをもたらす水源という自然エネルギーを持つところ、さらには死後の世界と考えられるなど多くの人々に様々な認識がもたれていました。

一方で、山には、人間の力では成し得ない自然界が及ぼす多くの情景（巨石、巨木といった自然が造り上げた造形物の姿や昼でも鬱蒼として暗い雰囲気や凜とする静

けさなどの神秘的な空間構成など）があり、変化に富んだ情景の中

で、山伏たちは修行を重ねていったのです。特に山中の滝は、山から発せられるあらゆる自然界の生命を育む水が力強く、急斜面を流れゆく姿となり、まさに山の神と仏のパワーを体感できるもので、こぞって山伏は滝の周辺で修行に励んでいたのです。山に降った雨は、地中にしみ込んだり、大地の表層を流れたりして平地へ向かいます。その途中の山中で、土壌や岩石などの地形と地質の条件により滝となる水流があります。

石岡市には、瓦谷の鳴滝や真家の馬滝があります。鳴滝は、水音を発しながら流れていたことから命名された長さ76メートルに及ぶ、見事な滝です。滝の脇には鳴滝不動があり、小堂には不動明王が祀られています。不動明王は、炎の中に忿怒相（怒った形相）で威嚇し、諸悪魔を降伏させ、仏の道へ導こうと現れた大日如来の使者です。また滝の中腹には、慶応2年（1866）に造られた不動明王の石造物があり、この不動明王は、



修験者を身守り続けてきた不動明王

山に関わる山伏にとつて本尊とされてきたものが、地域の人々にも信仰されるようになったものです。筑波山をはじめ加波山や足尾山などの筑波山系の山並みの多くの場所に、山伏が活動した跡があります。そこには、「不動」という地名や不動明王の木造仏や石造仏をみつけることができます。半田山の七不動（杉沢不動・檜の木不動・女瀧不動・大日不動・羽渡り不動・田中不動・御手洗不動）やつくば市との山境となる不動峠などはその代表です。このような場所では山伏は、山の神や仏を体感し、一体となる、そしてご加護を得るという考えで修行に励んでいました。山頂や中腹の山から発せられる水が力強く流れゆく滝は、まさに山の仏と神のパワー、そのものです。まさにパワースポットといえるでしょう。

八郷盆地ジオサイト

―自然の恵み豊かな盆地を開発した古代豪族の古墳を楽しむ―

八郷盆地ジオサイトは、南に宝篋山、西に筑波山や加波山、北に吾国山や難台山などに囲まれた八郷地域に位置します。これら山並みから流れる出る河川が恋瀬川に合流し、恋瀬川は南東の霞ヶ浦に注ぐために、八郷盆地は南東部が開けるといふ地形と地理的な特徴があります。八郷盆地は、筑波山系の山並み



柿岡地区の開発行った古代豪族の墓（正面の台地に丸山1号墳がある）と豊かな恵みをもたらす続ける恋瀬川

が隆起して出来上がった後、中小河川によって浸食されて出来上がりました。この八郷盆地には、大別して上、中、下の3段の段丘がみられます。上位段丘（標高50〜70メートル）は、10数万年前またはそれ以前に堆積した浅海や海浜によって運ばれた堆積物、中段段丘（標高27〜45メートル）は、下末吉海進期と呼ばれる12〜13万年前或いはそれ以降の海底、そして閉塞した入江（柿岡湖）をなしていた頃の地層、下位段丘（標高12〜28メートル）は、恋瀬川がつくった河岸段丘と考えられています。盆地という比較的寒暖の差が大きく、降水量が少ない気候条件、段丘の地形とそこに堆積した土壌が、豊かな自然の恵みをもたらす要因となっているのです。また、八郷盆地の水資源も人間の生活に持続的な安定をもたらす重要な要素です。八郷盆地を流れる恋瀬川は、小桜川、落合川、小川、小倉川などの複数の河川が

合流し、安定した水量を確保しています。特に柿岡周辺は、多くの小河川が恋瀬川に合流するところで、灌漑が未熟であった古代においては、水田に引く水量の調節がしやすかった場所です。このような水環境を理解し、支配した豪族がいち早く誕生した地域が柿岡です。柿岡には、丸山古墳群、長堀古墳群、下宿古墳群、佐自塚古墳、柿岡西町古墳、和尚塚古墳など総数41基の古墳が確認されています。古墳は、規模の大小と円墳、前方後円墳といった形態によりバリエーションがあり、栄枯盛衰した古代豪族の様子を今に伝えていきます。その中で、丸山1号墳は、初代開拓者と考えられる古代豪族の墓で、4世紀後半に築造された全長55メートルを測る前方後方墳です。八郷盆地に目をつけた丸山1号墳の古代豪族は、ヤマト政権が持ち得る水田開発の技術を取り入れ地域開発を指導し、恋瀬川水系の水環境を利用した灌漑設備を整え、八郷盆地の自然環境を多大に取り入れた農産物の生産システムを作り上げていった人物です。合わせて、丸山

1号墳の出土遺物が物語るように鏡（内行花文鏡）、剣（鉄製）、玉（勾玉・管玉）を用いた農耕祭祀を行い、作物の生育や豊穰に祈りを捧げていたのです。丸山1号墳の東側には、佐志能神社があります。佐志能神社は、龍神山麓にある村上・染谷佐志能神社が有名ですが、雨を呼ぶ神、水を司る神とされ、このような神が柿岡にも鎮座する理由は、やはり豊かな水資源がある地域、その水資源をコントロール（支配）できる地域ということを裏付けるものといえます。丸山1号墳に葬られた古代豪族は、自らが開拓した場所を望む台地に墓を設け、その子孫や一族も柿岡台地に墓を築いていったのでした。

八郷盆地ジオサイトでは、柿岡地区の4世紀後半から7世紀にかけての約250年間に数多く築造された古墳を散策し、1000年以上前の昔にここに古代豪族が存在したことに思いを馳せ、古代豪族が支配した米どころの農産物に舌鼓を打つてみてはいかがでしょうか。

峰寺山・十三塚ジオサイト

― 歴史人も往来した古道を楽しむ ―

峰寺山・十三塚ジオサイトは、石岡市北西部の筑波山に近い、上曾・吉生・小幡地区に位置します。この地区は、花崗岩という岩石が地形の基盤にあり、比較的硬い地盤といえます。しかし、花崗岩の特徴である複数鉱物の結晶が寄り集まってできた構造が裏目となり、気温の温度産による膨張と収縮作用で、形状が風化して「マサ土」と呼ばれる砂となることがあります。「マサ土」は粒子が粗いため水分を通しやすく、水はけを良くする目的で学校のグラウンドの土壌改良に用いられたり、園芸用土壌として販売されたりしています。峰寺山・十三塚ジオサイトには、こうした花崗岩がマサ土となった場所を上手く利用したものがああります。それは、峠道です。

古代において、常陸国府に赴任した国司は、地域全体の土地の豊かさや稲作の生育状況を確認するために「国見」という地域の中で比較的標高が高い場所から地域全体を見渡す任務を行っていました。常陸国司として赴任した高橋虫麻呂が詠んだ万葉集に登場する「草枕 旅の憂へを 慰もることもあれやと 筑波嶺に 登りて見れば 尾花散る 師付の田井に 雁がねも 寒く来鳴きぬ 新治の 鳥羽の淡海 秋風に 白浪立ちぬ 筑波嶺の 吉けくを見れば 長き日に 思ひ積み来し 憂はやみぬ」は、まさに筑波山に登り東西南北の地域情勢を確認した様子を詠ったものです。高橋虫麻呂は、常陸国府から小幡の十三塚を抜け、風返峠から筑波山へ登ったものと考えられています。

石岡市が古代において常陸国の中心地である「国府」となったことは、多くの方にと知るところではありませんが、国府へは様々な地域と結ばれる道が存在しました。古代の常陸国は、11郡の地域に分かれており、これらの地域からはそこに生活する庶民が治めた租税が、国府へ運ばれてきました。これらの租税を運ぶために各郡からは伝路と呼ばれる国府へ繋がる道が設けられていたのです。交通手段が未発達な時代ですので、物資を輸送するには水辺では水運が有効なものでしたが、一般的には人力か牛馬に頼るしかありませんでした。そのためいかに短距離で、安全な道を確認し、利用するかが重要な要素となっていました。現在は、

特に山越えの道は敬遠されますが、古代は山越えの道、つまり峠道は、短距離で行くためのごく当たり前の道だったのでした。



古代以来の重要な峠道が県道として再スタートしたことを祝う記念碑（湯袋峠）

峰寺山・十三塚ジオサイトには、前述した十三塚の高橋虫麻呂が通ったと考えられる風返峠の他に、峰寺山の湯袋峠があり、重要な山越えの道として歴史を刻んできました。これら峰寺山・十三塚ジオサイトの峠道は、花崗岩のもろい部分を沢や雨風などが長い年月をかけて崩し、谷筋や周辺よりゆるやかな地形となったところを利用した道です。上曾峠は、別に銚子街道とも呼ばれ銚子の水産物を茨城県西部へ運ぶ人などが利用し、さらに上曾峠の西側に拠点をもつ戦国武将の真壁氏も鹿島神宮へ赴く際にも往来しました。万葉歌人の高橋虫麻呂の他にも風返峠は、筑波山の参拝者や水戸藩天狗党などが往来した道です。湯袋峠は、峠を挟んで平将門が平良兼と対立したことから知られるところです。峰寺山・十三塚ジオサイトでは、峠道に注目し、歴史人物に思いを馳せながら古道を散策してみたいかがでしようか。

龍神山・波付岩ジオサイト

— 大切な水に対する文化と海に関わる名称を楽しむ —

龍神山・波付岩ジオサイトは、石岡市のほぼ中央部に位置し、標高196mの龍神山が象徴的に存在しています。霞ヶ浦方面からこの地域を望むと、平坦な場所から存在感あふれる姿を示す龍神山をみる事ができます。

龍神山の周辺を歩くと小川となつた水の流れや湧水がみられます。龍神山と波付岩の中間斜面から発せられ、金山池を経て南流し、恋瀬川に流入する「高野川」、龍神山の東側斜面を水源として南流し、恋瀬川に合流する「高根川」、そして龍神山周辺に降った雨水が形成したとされる「柏原池（山王川の水源）」は、その代表的な小川や湧水池です。このような豊富な龍神山周辺の水により、いつの日か龍神山には、水資源を司る神や仏がいると信じられるようになりました。村上にある佐志能神社には、御手洗と呼ばれる泉があります。御手洗も龍神山からの水が



宮平遺跡（風土記の丘）を繁栄させた龍神山

の若侍と美女」の昔話は、龍神山周辺の豊かな水環境を伝える貴重な資料といえます。

常陸風土記の丘の近くに「波付岩（別名・波止岩）」があります。波付岩は、明治34年『石岡繁昌記』に「波止石 同町大字染谷字上石倉に在り 高さ二拾三丈餘幅凡そ七尺 頂上に国常立命を祭る 口碑に曰く 往古此の辺霞ヶ浦の一部にして波濤常に此に激す 石岡町の西方より東に廻る恋瀬川の流域 即ち其遺跡なりと 今其地形を察するに蓋し信なるが如し」とあり、当地が古く海辺の環境であったことが明治時代にはすでに「波付岩」をもって説明されていたことが分かります。「筑波山」や「加波山」にも波の文字がみられますが、これらもこの地域が昔に海だったことを想像していた人々が、筑波山の山並みを防波堤と想像していたために付けた名称の可能性があります。波付岩自身は、約2億5千万年前〜1億5千万年前に海溝近くでつくられた付加体という岩石や堆積物に成因が

ある雲母片岩です。かつては、波付岩に貝殻が付着していたという記録もありますが、雲母片岩に含まれたチャートや石灰岩などの礫が、白く貝殻のように見えたと考えられます。龍神山や波付岩周辺には、約13万年前〜12万年前の時代に「古東京湾」と呼ばれる海が広がる環境がありました。その時の砂や泥などからなる堆積物が周辺にみられます。この海により運ばれてきた地層には、砂鉄が含まれています。波付岩に近い場所に営まれた古代集落の跡「宮平遺跡」からは、この砂鉄を利用した鉄作りの跡が発見されています。砂鉄を地層から取り上げ、他の土砂と分離する際は、「鉄穴流し」と呼ばれる水流による分離法で、当地域の豊かな水環境を利用し行われたと考えられます。

龍神山・波付岩ジオサイトでは、豊富な水資源にみる古代からの水に関する文化や遙か遠い昔に往時の姿を想像し名付けられた海に関する名称に思いを馳せながら散策してみたいかがでしょうか。

石岡・高浜ジオサイト

— 水辺の景観と水上交通の歴史を楽しむ —

高浜・石岡ジオサイトは、石岡市南東部の恋瀬川河口から霞ヶ浦の高浜入りに位置し、水辺に展開する地形と自然環境を利用した歴史や文化が育まれた地域です。

約2万年前の最終水期に恋瀬川の活発な下刻作用（川底が削られること）によって深い谷地形が形成されました。その後、この深い谷地形に縄文海進による海側からの堆積物、そして恋瀬川などが運ぶ土砂が次第に堆積していき、霞ヶ浦の高浜入りができあがったのです。内湾を呈する霞ヶ浦の北西部にできた穏やかな水辺の高浜入りは、その後も土砂が堆積し続け、浅瀬となったところにヨシ・マコモなどの水草が繁茂して湿地となりました。元禄16年（1703）『三村高浜入絵図』では、高浜神社付近は水田とわずかな湿地、高浜の港付近は完全に水辺となっていました。約180年後の明治17年（1884）『迅速測図』で

は、高浜の港付近は湿地が拡大しており、湿地の中に船の航行のための水路が設けられていた様子が分かります。このように高浜は、恋瀬川などの河川が運び込む堆積物が、高浜入りの遠浅な水辺環境を作り上げたことで港となり、さらに水辺が内陸部に入り込む地理的環境から、いつの時代も交通的要衝地として利用されたのでした。

高浜の港としての歴史は、古墳時代には始まっていたと考えられます。現在では恋瀬川河口域となりますが、古墳時代は高浜入りとなっていた水辺に面する台地に舟塚山古墳が築造されました。舟塚山古墳は、関東第二位の規模を誇る権力を保持した古代豪族の墓ですが、その権力の背景には、人の移動や物の流通をコントロールできる高浜の港の支配がありました。港は、水上交通の拠点であると共に陸上交通と繋がる所でもあり、内陸の人々の往来や産物が集積さ



1000年以上も港町として繁栄した高浜。その名残の船着き場。

する地域となりました。高浜の町並みの中央部に建立された西光寺（現在は爪書阿弥陀堂のみ残る）には、浄土真宗の開祖である親鸞が、鹿島へ向かう際に高浜の港を利用した伝承があります。

近世は、高浜の港が最も活気あふれた時代で、諸藩の年貢や周辺地域の産物などを江戸へ運び込むために高浜が利用されました。江戸時代前期の史料によると高浜の町は、東町・西町・東仲町・西仲町の4地区からなり、人口518人が生活していたことが分かります。そして町には、高浜の人々が信仰する、高浜神社・大杉神社・金比羅神社・天満天神・花蔵院・常光院・西光寺・高瀬寺・神宮寺がありました。賑わう高浜の様子は、高浜神社の絵馬（指定文化財）が具体的に示しています。

明治時代には、高浜に鉄道が通り、高浜駅が設けられ、水運と陸上交通の要衝としてさらなる発展が望まれました。高浜・石岡ジオサイトでは、古代から多くの人々に愛された水辺の景観と港町としての歴史や文化を堪能してみたいかがでしょうか。

筑波山地域ジオパーク

筑波山地域ジオパークは、国内で41番目の日本ジオパークとして、2016年9月に誕生しました。

茨城県南部に位置する石岡市・笠間市・つくば市・桜川市・土浦市・かすみぐら市の6市からなるこの地域は、茨城県の約20%の面積に相当し、日本百名山の一つ筑波山、国内第2位の湖面積を誇る霞ヶ浦や日本最大の平野である関東平野など、日本を代表する大地の遺産を有しています。

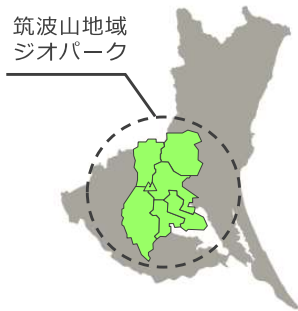
筑波山地域ジオパークは、エリア内が筑波・鶏足山塊ゾーン、霞ヶ浦ゾーン、山と湖をつなぐ平野ゾーンに分けられています。各ゾーンでは、構成する地形・地質の特徴や成り立ち、数億年をかけたダイナミックな大地の変動、数十万年続く地表付近での静かな大地の変化などを感じるすることができます。

筑波山地域ジオパーク内には、本地域の地形・地質・特に石・土・水とかわりの深い人々の歴史・文

化・産業が数多く残されています。こうした大地と人とのつながりを楽しく学べるのも本地域の魅力です。



筑波山地域ジオパーク



筑波・鶏足山塊ゾーン

筑波山をはじめ、筑波・鶏足山塊の地質から、長い年月をかけた海洋プレートの大移動と沈み込みや、地下深部でのマグマの形成まで、数億年前以降のダイナミックな大地の変動の歴史を学ぶことができます。



山と平地をつなぐ平野ゾーン

日本最大の平野である関東平野の特徴や成り立ちを学ぶことができます。関東平野を流れる蛇行河川がつくり出す地形・地質のほか、里山・湿地の生態系や水害の歴史など、河川の恵みや猛威、それとともに暮らす人々の営みにも触れることができます。



霞ヶ浦ゾーン

数十万年前以降の気候変化や海面変化、地殻変動がつくり出した地形・地質の成り立ちを学ぶことができます。また、霞ヶ浦周辺の地層に含まれる化石や、現在霞ヶ浦とその周囲に生息する動植物から本地域の環境変化に伴う生態系の変化を追跡できます。

